

水 狂 田 久 幹 主

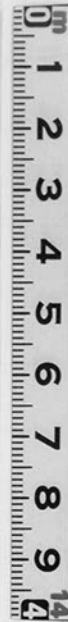
# のぼけあ柳川

號 月 六



昭和二年九月廿七日第三種郵便物認可  
昭和五年六月十日發行「毎月一回十日」

あけほの 第五卷 第六號



本號正誤表  
頁 段 行

九 下 八、九 心のユトリが無さ

八頁ヨリ十頁へ行キ夫ヨリ九頁ニ歸リ十一頁ニ續ク

四ツ手駕の漂は皆標

一五 上 五 シャッターへ

全 全 七 追儼

全 全 一一 有名な

習 作

久 田 狂 水

ビルデング眼下に遊ぶふきながし

雨催ひ母桑の葉へ氣が苛ち

ゴム靴を隅に押しやる梅雨上り

久し振り矢場に眩しい陽を仰ぎ

一錢のつりへ手間取る乗車券

敷金も家賃に消えて雨が漏り

貸家札賣つてもよいと書き添へる

# 心影録

福島 吉成 剣突坊

味つて盛つた器の底が見え  
誘惑がなければみんな處女で居り  
年々に理想を遣ふて減る腫  
一年の試験何處かにある苦痛  
眞直ぐに行けば行くべき道は絶え  
淋しさを朝に持ち越す獨り者  
就職になやみ疲れた靴の底

名古屋 佐々木 鳳石

下宿屋の娘に隠された繪封筒  
鉢の梅明日さく蕾敷へられ  
桐火鉢客間の隅に冷えて居る  
日曜を兎に角出てく獨り者  
花日和今日も眼科で順を待ち  
折角の下駄へ素足の跡がつき  
重役になる氣給仕は苦學をし

名古屋 吉田 一 鳳

店中で蕎造りを解く大金庫  
夜學生校舎の暗い灯に遅れ  
長話し酒が廻つてくどくなり  
至急封ポストの中で夜を明し  
初奉公其夜皆ないたづねられ  
裏二階三味の音から更けてくる  
引出しのすみに小刀錆びて居る

名古屋 鳳 人

大戸棚隅からかびの臭ひがし  
撒水の後からフェルト愚痴て行き  
マラソンの關所一抔ついで呉れ

桑原 狂 雨

藥劑師服の白さの閑續き  
中二階賣子の忙しさを眺め  
雨の日の狭ふ自轉車屋は動き  
真夜中を歩く女は振り向かれ  
喰ふ丈と云ふ大阪が物足らず  
掛芝居母親ばつかり留守の役

札幌 大久保 信子

そば濡れてボブラ何にも不平なく  
餘念なく日焼けて娘畑を打ち  
灯に向けば花にも暗い影があり  
咲けるだけ咲いて果敢ない櫻花

井出 ○ 太

親のない子に螢分けてやり  
夢の間に半分割いたカレンダー  
考へて見るのが永い資本主

名古屋 奥井 千 鳳

筒袖の妹に借手を頼まれる  
五月雨にいよ／＼陰な佛具店  
思ひ出し笑をベランダで見られ  
普請場へ一杯あての茶が足らず  
椀ぎ取つた鉢へはふ子顔を上げ  
繪葉書のまゝの景色へ月を入れ  
自動車の中で「左様なら」  
ケーブルを横目で登る握る飯

大阪 石 悟 空

釣道具父は嬉しく家を出る  
銀行に裏門がある顔馴染

奥様の料理女中の氣に入らず  
腕と腕角力のうでの力こぶ  
親として世間へ見せる涙なり  
毎日の市電に席が見あたらず  
共同の事業大きく云つてのけ  
祝言へ父もうれしい唄が出る  
雨上りみゝすはつきり跡をひき  
こゝらから流れにまかす渡し守  
寝たどこに指の縞帯抜けて居る  
瓜弾ぎで朝から今日も仲がいゝ  
晝風呂に乳から下が明るすぎ  
居すまいはどうかろうとも男の子  
女客 氷を氷にして話し

名古屋 鈴木 可 香

松江 木村 三 雷 波

ブランコをいきなり押した男の子  
街路樹は夏の埃を溶びてゐる  
風船へ息の足らない顔になり  
口笛をいきなり止める人に逢ひ  
後ろから長い手も出る下足札

吸殻をいきなり捨てたいと思案  
メートルの目もり留守居あはてての  
頬杖は燭の出来るも待つてゐる  
頬杖のそこへ夕刊投げ込まれ  
殿様が壽司をほはばるロケーシン

東京 城所 夢男

仲人の背中を頼るため涙  
箱止めをいい事にして遠出番  
幸福を想う晝湯の陽を見つけ  
兄さんの脊イが草履を好きにさせ  
苗屋の聲に盡きる梅雨晴れ  
酔醒の遠く女の聲を聞き  
獨り者夜ルへ觸れない様に寝る  
雑布を差すにも姉は赤い糸  
兎も角も家政婦を置く三七忌  
腹ばかり減らす小僧の無表情  
腹の立つ日の薪割はハカが行き  
いつしかに菜の花手にぞありにける  
春雨に濡るゝがましの庭師かな

石川 源代 朱伯

地に起てば真正面より夏の風  
祝。一都君新婚を  
初夏の緑りに新らしき若さ

### 石城名勝舊蹟を尋ねて [五]

吉成 劍突 坊

慶長年間平城主島居忠政、水害防止祈願のために、  
鎮座せられたといふ、白土の村社三島八幡神社を  
拜して夏井村に出る。本村の各大字が何れも夏井  
川沿岸に位置するので、村名を立つとある。  
専稱寺 夏井村大字山崎にあつて、境内頗る高丘  
平町を距る東方約一里、淨土宗梅福山と號す。

境内へ登る一足づづの汗

慶永二年良就證覽上人の開山で、上人山城國男山  
に生れたが、幼より奥州に下りて、良山上人に就  
き習學。或時一夜石森觀音に參籠せられしに、夢  
告があつて經營したとある。

専稱寺夢に繪圖面出來上り

六代良大仰觀上人の時、延徳二年六月、後土御門天

東西屋こゝまで得意取るつもり  
矢車はなれどうれし初轍  
母ありて草餅とどく二階借  
手術をば終えし吾子を見守りぬ

名古屋 小川 蘆笑

奴隸ではないに奴隸のように生き  
盛り上げて八百屋はまけるように見せ  
團體の力損得考えず

森田 心太

病床にて

紙白きまゝ病床に日暮れんか  
口が淋しい午後の陽射しよ  
咲き揃ふ花瓶があまりにも小さし  
どうあせれども重たさの退かぬ胸  
心臓の弱さを抱けば夜の闇  
沈み行くしづまの夜具に身を任せ  
朝風となる明るさへ身悶えぬ  
敗けられぬ旅の疲れの汗となり  
ぬくもりを筆に知りたる風嬉し  
謝。千波君に

皇より勅願所の繪旨を賜つて奥州總本山と稱するに  
至り、幕政の時には寺領七十石を有したといふ。郡  
内屈指の名刹で、結構莊麗、規模の宏大なること、  
開山當時の有様も想像するに難くない。斯る由緒正  
しい寺院のこととて什寶も亦豊富で、國寶の價値あ  
るものも數多あつたそうだが、寛文九年の回祿に悉  
く烏有に歸してしまつたそうなる。

什寶の灰でやたらに草が生え  
形容も話も出來ぬ勝地なり  
街道に一ふくしてゐるの見える

如來寺 専稱寺の東方にあつて松峯山と號し、淨  
土宗准檀林である。舊名矢の目村といつたところか  
ら、一般に矢の目如來寺と言つた方がわかり易い。  
名越善道上人の法孫良山が、矢目、荒田目等の領主  
大江氏の歸依によつて、元享二年に開かれた道場で  
奥州淨土宗最初の本山たりしを、専稱寺に一切を譲  
りて競争などといふイガミ合を水に流したとは美し  
いことである。

得度して喧嘩しないは佛様  
幕政の時は寺領二十石を有し、傳來の寶物頗る多く

中でも絹本着色繪畫、阿彌陀三尊像一幅と、彫刻銅造阿彌陀如來、兩脇侍立像三軀は、近年國寶に指定された世上稀有の逸品、夙に覽者の激賞を博して居たものである。

#### 國寶にあがる如來の御姿

愛谷渠碑 如來寺の近き愛渠側にある黒花崗岩で厚さ七寸幅三尺五寸、高さ六尺三寸、大須賀篤軒翁の撰文に、副島種臣伯の篆額、正四位勳三等金井之恭書とし明治二十七年十月と刻す。今碑文の一部を直譯して其の内容を明かにしやう。

(前略)承應中澤村勝爲、小川江を開鑿して民の塗炭を救ふや、識者のために斃る。水守治右衛門氏また内藤侯の微臣たり、勝爲の業遂げざるを慨き奮然蹶起身を以て自ら任じ、寛文の初め小川渠を改修して大室、大森の二洞を鑿つ。延寶中新に此の渠を以て磐前郡に灌がんことを決す。渠を愛谷に起して夏井川に暖し、長さ七十六間の巖脚を洞して水を容る。水勢奔放東南川中子に至る。好間川を劃し前には乃ち槽を架すること長さ百七十尺繞りて平町の東に出づ。支流町を貫きて長橋に溉

ぐ。幹流槽を古川に架し、專稱寺の麓を環りて、山崎、菅波、荒田目、上、下大越、藤間に溉ぐ、南下高久に至り槽を荒川に架し、餘流を導きて沼之内に溉ぐ。迂餘曲直長さ四里五丁有餘、胸門大小十四、陰窺百九十八、灌田五百十町餘歩。是に於てか二郡の水利始めて淡くして澤村氏の遺志全く成る。稱するに上下といふ、地勢の精測疏導の周到、後世以て加ふるものなし。(下略)

#### 永遠に流れて盡きぬ水の音

國寶を見てから右を賞めて讀み

大國魂神社 大字菅波の地に鎮座する縣社で、事代主命、大己貴命、少彥名命を祀り、延喜式神名帳に列せられた古社であるだけ、鎌倉乃至南北朝時代の古文書二十餘通を藏せらる。元祿中領主内藤義孝これを裝軸して社寶とせられたのが今に傳へ、嘗つて帝國大學の歴史編纂資料に採録された貴重のものである。延寶中たま／＼社側の地を穿つに當り、菅玉や、鬼角と稱するものを石室の中に獲たとふのがこれも社寶として藏せらる。

此の地もと國魂といふ里落であつて、即ち國魂神を祭つたところを見れば、古へ此處に國造を置かれたことと思はれる。

社前に「相生松」といふがあつて、雌雄二幹同根より生じ、翠蓋亭々雲霄を摩するの概がある。古來諸婚の靈瑞ありとて、青年男女の賽するもの多いといふことだ。

神様にかしは手をして錢を投げ矢の根石くらゐないかと目をくばり面赤く成つて相生松に寄りそつと來てそつと歸るも面白し

兜塚 大國魂神社より程遠からぬ甲塚と稱するところの田間にあつて、其の形恰も兜鍪を張つたやうに見ゆるところから、此の名があるといふ。面積八畝歩許りで、其の上に老松一株がある、高さ三丈幹の廻り一丈五尺許り、翠蓋數十歩に張り、枝葉翁鬱として宛も小や林のうに、八面殆んど同じ觀ゆるので八方睨みの俗稱がある。由緒にいろ／＼の説にあれば、古制によれば山陵必らず宮車に象るとあり、これは即ち兜に象れるが故に武官の塚にして、

岩城國造 建古呂命の墳塚だといふのが有力のやうだ。

#### 考 古家を八方にらむ兜塚

延館墟址 大字下大趣にありて又の名を長者平ともいふ。谷を二丁程登ると、土地が平坦になつて南北凡そ七十間、東西凡そ四十間、四方に掻き上げた土居があつて、其の陰を見ると小溝らしい跡がある東西は何れも谷で、西の土居から小經を南行すると高久村に至る。西方の谷を隔て、大承峰といふ山があり、北方の眺望頗る廣い。傳へて岩城國造の墟といふことは夙に識者の認むるところで亦疑ふ餘地はない。今は多く鋤かれて麥龍桑圃と化したのが尙ほ形跡は歴然として居る。尙ほ此處から三丁許り行くと白岡前と稱する耕田の中に一區の茶地がある。此處から敗瓦累々として出で、又斷礎四五確乎たるものがある。傳へて堂塔の遺址といひ、近頃保護に指定されたやうに聞いた。今、村社白山社々掌鈴木氏の家に藏する土器三個、石斧七個、石簇八個、勾玉一個、及古瓦數個がある。古社寺保存會委

員工學士關野貞氏の鑑定によると、土器はコロボツクル人種の製作で、少くとも三千年内外のもの、又古瓦は奈良朝時代の製作で千二百年内外のものと云はれて居る。

徳利のカケラに鉄の手を止め

踏み進む行く手はみんな麥島

久保中山観音 飯野村大字中山にあつて札所十六番に當る。

中山ときいてのぼりて朝日さす

森のこかげにたつは白なみ

あさひかた夕日にもれし中山は

波のひゞきにまづ風の音

龍澤観音 飯野村南白土大龍寺にありて札所二十番に當る。

山高くなを佛の龍澤や

流れのするのつきぬあはれみ

下大越観音 夏井村下大越安祥院にあつて札所十九番に當る。

面白やたづね来て見ようしんじ

くれなゐ梅にますがたの池

夏井川 田村郡より來りて石城郡夏井村下大越に至り大海に注ぐのであるが、夏井川の流域一里七町五十七間、仲秋の候になると鮭の漁が多く、其の捕獲する状況頗る壯觀である。

維新前は鮭川御連上場と稱して、沿岸の各村より川頭なるものを選し、之が漁業の指揮をさせたが、維新後になつて夏井草野の兩村の漁業者共同し、頭取を選定して其名様に納金を納め、交互に漁業を営ましめたといふことである。

明治四十三年になつて上流各村と組合の規定を設け、天然孵化場を平町鎌田川に設けたるも良好ならず、更に明治四十四年に至り、相馬郡新田川鮭魚孵化場に倣ひ人工孵化法を研究し、同場から卵種十萬餘を取寄せ大字上大越字五味作孵化場に於て孵化せしめ、育成するに及び第二孵化場を大字荒田目に設けて飼育したところが、其成績頗る良好で、翌春になつて体長二寸位に成長したるものを放流したそうである。斯くして其の種族の増殖を圖り、今尚ほ盛んに仲秋の季節を賑はして居る。

鮭を土堤に見て居る人の山

柳は談林系の俳風を主とする爲め、初代川柳期の柳人の名は王明時代の通人的俳名で有つて、俳名のないを遣手は嬉しがり」の句の如く當時の遊蕩兒の多くが名付た談林派の俳號に近い元祖の初代川柳の川柳は申すに不及、市谷初瀬連の雨譚とか万軸とか、麻布柳水連の柳水とか石斧とか、其他杜若、五町、五扇、李牛、柳舎、百千鳥、鳳頭、魚交、錦江、柳燕、五英、五連、斗石、和笛、淺裏、管理、玉章、雀芝、水府、十口、龜遊、菅江（朱樂菅江）泉河、東里、門柳、木綿等の例に徴して其人々の持つ内容も推知すべきである。

◆故に久良岐と言へば國學系統の人間たる事が分り、故に久良岐と言へば漢詩系統の人たる事が分る。柳花坊、秋劍と言へば漢詩系統の人たる事が分る。柳花とは及の句ひである、ソレへ喧嘩の洒落を結付けるので、此坊は江戸元祿期に取られん坊だの、下に坊を添える事が流行した、今日の各藩漢をケンポーと言ふ類でケンクワツポーは喧嘩坊である、今から二十七八年前の諺に「久良岐暗からず剣花坊喧嘩せず」と云ふのか有つた、ソレは久良岐が氏一流の新狂句を盛に駁撃を加へた

からである、従つて命名の意味が古川柳作家と大變に相違してゐる、古川柳作家は少なく其粹とか洗練洒脱を命名に意味してゐるが、現代川柳の初頭にはソナナ氣持は更になやうである。

◆歌とか川柳とかに實名を名乗る人は自分は賛成しない、元來假象美を生命としソレに遊ぶ人間が法と同一の名付を名乗るのは餘りに心のユドリが無き過ぐるからである。

## 四ツ手かどに就て

愛知 加藤 文 醉

四ツ手は猪牙船と共に江戸時代交通機關の一つである、明暦の大火に元吉原も類焼し、山谷等に假宅を設けたので、遊子漂客の舟行するもの漸次加はり、遂に船宿を業とするものが出来たのであるが、新吉原へ移轉後、漂客は舟行の外、馬に乗つて通つたものもあつた、古川柳の

船廻しのも岡づけも土手へ出る

といふ句は、その意味を詠んだものである。

ふりかざす小網小網に慾が見え  
一匹を土産に返る夕景色

## 川柳の雅號に付いて

阪井久良岐

◆川柳の雅號に付いて時々質問されるから、何か此川柳雅號に付いて意見を書けと言ふ久田兄の御依頼に付き一寸愚見を書付いて見やうと思ふ。  
◆元來雅號は支那から來た者で、其生れた折の城名とか、山の名とか、川の名とかを取つて何々山人とか何川漁郎とか何山樵夫など、假りに號を書いた者である、又は新井白石の如く、古の支那人の偉い人を慕つて其名を付ける如く明和の頃の画人楠阿某が支那の宋紫岩と云ふ画の名人を慕つて宋紫岩と號した處の類例がある。

◆所が加茂真淵先生は國學中興の祖で、漢學は徂徠門の服部南郭に學んだが、支那人ならば都市は城廓に作られて石の牆壁で包まれてゐるから、何城居士と云つても差支ないが、日本人がソレを徒ら

に模倣して、例へば太田錦城と云つた類號を付けるは面白くない、生れた所の名を付けるならイッソ日本式に付けるのが良いと云ふので、遠州濱松の生れ故、敷智郡であるから、其郡名を取つて其れに眞の一字を付して眞敷智と號し更に眞淵の二字に改められたのである、余も此説を尤と思はれるので、横濱市野生町の産故郡名を取つて久良岐と號したのである。

◆明治二十年前後は硯友社全盛期で、尾崎紅葉山人巖谷小波山人だの細山人だの有らゆる文士が何々山人と號した、其時にタツタ一人宮崎三昧子が東歸坊と號してゐたので、余は英學全盛期に教壇へ「徒然草」を持參して愛讀してゐたので、「日本」新開へ投稿は常に徒然坊と號し又つれ／＼と盡した然るに某氏が其後新川柳を「日本」へ掲載する時何々坊と云ふ名を付し、ソレを滑稽と思つたが、ソレは狂詩とか狂歌の命名法であつて川柳の正しい命名法ではない、古の狂歌師に確連坊と云ふ名を見たことがあつた、ソレと古の俳人には何々坊と命名する者が多かつたのは云ふ迄もないが、川

淺草の馬道は、此の馬の通路であつた爲に其名が起つたと傳へられてゐる遊客は二人の馬士に手綱を取らせ、小室節を唄はすのを華奢として、白の扮装で白い馬に跨がるのを得意としたものである、此を輕尻馬又は土手馬と稱へた、されど此輕尻馬も江戸の交通機關の一に數へねばならぬが、これは貞享、元祿以前に廢れ、その利用された期間も短かいから記すべきことを略して今回四ツ手駕に就き一言することにする。

「守貞漫稿」に四ツ手、江戸民間の専用の籠なり、京阪には無え、(中略)世事談曰、江戸辻駕籠は元祿の末に御免許高百挺也、其初は老人、女、病人に限り若き者は乗らず、是迄は江戸に辻籠なし云々、守貞按するに辻駕といふは、路上に客を待て乗せたる故の名か、今は諸所に駕籠屋あれども、亦行人多き所には夜は傍にたゞすみ客を待つ、暗夜などに不意に往くに、彼の駕籠屋「だんかこ」と呼ぶ、旦那かご如何の略なり、不意なれば驚くことあり、今四ツ手の數も萬を以て數ふべし、何れの年に元祿の定數を廢止ありしか追考すべし、四ツ手の急速を専らとする

時は、二夫一步、各々發聲して「はあんほう」といふ也、俗に掛け聲といふ也、四ツ手賃錢日本橋邊より新吉原大門迄大略金二朱、即錢にて八百文ばかり也三夫四夫にて輪替にてかくも之に準じて金三朱、四夫は一分也云々。とある、右は嘉永頃の賃銀と駕籠數である、四ツ手の數が萬を算するに至るは、當時の士民が如何に肩輿を利用したかを窺ふことが出来る、其輕快敏活なさまは古川柳に數多詠はれてある、

四ツ手駕命のありつたけは駆け

四ツ手駕手の小百も駆けぬける

四ツ手ウヌ待てと生酔二町あと

二千里も行く勢ひの四ツ手駕

破竹の勢ひで四ツ手土手を駆け

値のい、四ツ手はから手が二三人

などの句頗る多きを見るも明かである。尙寶曆、天

明、の駕賃も二夫一步であつたのは、

かご賃をかちかんだ手へ一步取り

の如き類句多きに於ける。前記の如く四ツ手は江戸士民の交通機關であつたが、特に遊子漂客に便宜を與へたのであるから、二夫一步の定めはあつても

一聲が何程につく籠にのり  
の如く法外な賃銀を食られ、或は意外な、酒錢を強  
請され、遂には

三分一土手を残してねだるなり  
旦那もしいつそ沼だどゆするなり

の憂き目を見る事は珍らしからぬ、殊に

天窓から乗るので四ツ手ゆするなり

遊びではないと四ツ手の値をねぎり

の如き野暮な客と見れば、かこかきは之を翻弄して  
苦めるといふ有様である、一面には右の如き横暴を  
極めて、士民を苦しめたが、一面には漂客の爲に少  
なからぬ便宜を與へたのは叙上の如くである、此の  
四ツ手も天和の頃に停止を仰せ付かつたことがある  
それは當時、山田彌市といふ浪人が、金銀を奪ひ取  
り、人を殺した罪に依り、公儀は嚴重に探さくして  
漸く越後新發田に捕縛して尋問の結果、彌市は其筋  
の目を逃れん爲、晝は辻籠に乗り夜は屋形船にひそ  
んで居たことが發見して、籠も船も捕亡の妨げとあ  
つて、令を下し之を禁するに至つたのであるといふ  
其後元祿の頃に籠の禁を解かれ、戸なし籠を許され

たので、其數も百に制限されたのであらうと思はれ  
る、然るにいつの間にかゴザの垂れを掛けて垂れ籠  
となり、老夫病客、婦女の外は、みだりに乗ること  
が出来ぬ定めも破れて、爾後漸く盛んになつたので  
再び之を停止せしめたがかこかきの輩は、にはかに  
産を失つた爲に困窮して、途に食を乞ふ者が現出す  
る有様となつたので、享保九年官は之をあはれんで  
遂に前に復ることとなり、若き者は乗らぬといつ  
た昔にかへて遊子漂客が盛んに利用するに至つた  
のである。

(完)

昭和五、五、一四記

## 五月の「あけぼの」

中村 山門

四六横綴は昭和四年末迄の物、菊判になつてからの  
「あけぼの」は狂水氏の雑誌經營者であり、作家であ  
り、投句家である七面六臂の躍進ぶりに相俟つて  
漸次精彩化して來た事を見る人を知るである、然し  
て四六より菊判になつたといふ事が「あけぼの」の完

きを期した物とは思はれないのは當然である、粒々  
五巻の歴史を踏攀して來た一人役者の狂水氏の、今  
後まだ、數限りない川柳の苦難に對する努力が續  
けられつ、往く事であらうと思ふと、一種の敬虔的  
な感を享けるが一面には受難者のみが知る、感激的  
な興趣を感ずるならば、それに對する變態的な羨望  
を感ずるのが心なき川柳人の常である、誠に行する  
者苦多しと言はざるを得ない次第である。

五月號を拜見する、先づ創作欄「心影録」作家は例月  
に比して勤いやうであるが、粒摘みのメンバーであ  
る。

睫の先に躍る春の陽 千鳳

草花屋日覆の蔭を境にし

前句は或る派に於て、流行化しつゝある調、凡のそ  
しりは免れないが綺麗に纏つてゐる、後句は日覆に  
よつて草花屋の美をチェンデさせたる手際、腕のあ  
る作家なり

自己の存在の不思議なおそれ 泰次郎

今日の日を生きて一日悔ひを増す

泰次郎氏は自分の僚友の一人であつて、中央柳壇に

於て良き作家の一人であるが、句會といふ物に疑ひ  
を持つて、目下本誌と大阪「玉むし」誌にのみ投句し  
てゐる異色のある句風の人、茲に摘出したる二句、  
前句は人間的な或る日の疑ひを唱ひ、後句は弱者感  
的絶望感を唱つた句自分は斯うした感じが全然ない  
とは否安しないが、斯うした句共を待つ者ではない  
吹き募る風へ硝子戸答へてゐ 三雷波

戀人の顔が歪んだ硝子越し

前句絶え間なく吹く冬風、それに鳴る硝子戸、配す  
る人は誰にてもよし、自分は一種の運命感を此句よ  
り受取る、後句恐らく三雷波氏も自信句ではなから  
う

覺えある女將あつさり貰うてやり

陽喜亭

トラツクが待つ荷造りへ飯が延び

陽喜亭氏は大阪鬼灯吟社の總帥、列句各番傘臭の嫌  
ひはあれど吟味してある、前句からは上方の持つ語  
美、後句からは軽い内容を頂く

打ち解けた心で春の夜を唄ひ

狂雨

春の陽に情けなく見る藥瓶

前句誠に平凡、後句若き作家に依つて感じられる句

であらう、外

學校の鐘で役場も飯になり  
舊友の名刺へ軽い餅みが出  
「癖み」は餅みの誤りと思惟する

さき氣なくバツトの箱を踏んで見る

かげろへる土にも生のあるものを

藤椅子にゆとりを見せて煙を吐き

二階借り五錢の葉ツ葉もて餘し

氏等々の各句、勝手に各作家の氣持ちになつて、感

興を壇まゝにした事を深謝する次第である。

まだ頁を逐つて愚想を述べる豫定ではあつたが、青

葉頃になると例年鼻に故障を起す自分、遂にペンを

措いて耳鼻咽喉科への支度に掛る、終りに狂水氏の

作句研究欄に敬意を表して引下る事にする。



### 作句研究欄

評者 阪井久良岐  
作句 久田狂水

▲黒星に射込んでゆとり見せて居る

評「ゆとり見せてが」説明

▲二日酔昨日を悔いる氣にもなり

評 概念に過ぎ

▲夕刊を投げ込む勝手勝が伸びる

評 俳想

▲晝寝からさめて陽伸びを思はせる

評 俳想

▲隠居から新茶が薫る五月の陽

評 陳腐

▲渦もなく小川ちぎつた花がゆき

評 上五、説明

▲日曜の雨を見て居る懐ろ手

評 凡想

る、此區別が日本人にどうも分らないやうである。  
以下次號

川柳募集 奮つて御投句を乞ふ……

雑詠、句數、隨意

用紙官制葉書

発表 べ切なし  
いばらき新聞(毎日發表)

投稿所 東京市外淀橋角筈六五八

中村山門宛

### 課題吟

題 見物

大谷五花村選

自動車へ反り身見物押分ける  
黒山を築いてロケーション終り  
見物を押分けて来る巡査の眼

吟月 全一

親戚をみすく過ぎる団体旗  
見物に重たく廻るバスケット  
見物のコースを變える雨が降り  
見物の肩を凝せるツナ渡り  
エキストラ見物人の様に立ち  
団体で見物は只あるくやう  
花の山昨日の人に又出合ひ  
見物に亡き父になく母をつれ  
新婚の瀬戸内海へ舟に乗り  
活動の疲れを今朝の目に感じ  
見物の汽車を羨んで土を掘り  
見物をさす氣の母が汽車に酔ひ  
団体の襟を正した二重橋  
見物の耳へ煩い土産賣り  
支那手品涙へ金を投げさせる  
食券でする晝食へ物足らず  
見物に一人旅して氣が尖り  
舞台フト涙の顔が眼にとまり

鳳人 全 全 鳳石 狂雨 〇太 藤浪 だるま 芽柳坊 全 全 笑德 七笑 狂水 全 狂水 狂雨

題 相談

大阪 安井ひろし 選  
相談の纏りかねる電話口  
女事務同志土曜の夜を約し  
相談の席を新妻はづれてる  
相談へ給仕小嬢な智恵を貸し  
「相談」の決つたらしい笑ひ聲  
朝になりあつてなかつた事を知り  
當人の意見任せと酒になり  
案外な事に相談しかけられ  
代人は確實丈を聞いて行き  
代人はわからぬまゝで事がすみ  
相談の相手にされず金を貯め

天 遊廓を修學旅行よけてゆき 七笑  
團體旗玉の宮居は九の内 五花村

雨

吉成 劍突 坊選  
植る替へる花へ嬉しい雨が降り  
一と濡り火の用心の氣もゆるみ  
増水へ村を集める暴風雨  
通り雨女高下駄もて餘し  
裏長屋集るによい雨が降り  
雨らしい空へ汽笛が長ふ聞き  
眼の先を洗つたやうに雨が晴れ  
夜の底へ大きくひびく雨の音  
降る雨が諦めさせる花盛り  
毎日のあめで米櫃空になり  
失戀のあめの日頭痛しきりなり  
考へる積りへあめのまだやまず  
物干が隅へ溜つて今日もあめ  
咽びなくやうに葉に降る雨の音  
柱建して其まゝを雨に濡れ  
蛇の目傘真直にさす高島田  
降る中を來て懐中の足袋を出し  
干物を隣りへ頼む雨模様

坊選 芽柳坊 同 鳳石 七笑 一鳳 狂雨 だるま 同 同 〇太 同 悟空 同 落葉 全 藤浪 同 同

雨支度どうでもゆく氣かと聴かれ  
雨模様蟬のなき聲あはたし  
基敵が泊ると決める雨になり  
雨續きゴム靴で來る女教員  
敷金も消えて雨も其まんま  
夕立に虹を見つけた跳足の兒  
人 雨洩りがやんでバケツをあけて來る  
地 仕事着へ昨日の雨がまだ残り  
天 懐ろ手行くあてのない雨になり  
追加 日曜は雨につぶれて馬になり  
(参考句)  
大雷雨江戸へ密使の油紙  
米櫃の底が知れると雨が降り  
忠臣を銅像にしてあまざらし

可香 吟月 狂水 同 同 同 可香 狂雨 狂水 劍突坊 尺一 久坊 七四坊

# 募集吟

福島縣田村郡瀬川村

門鹿小學校

海と山

吉成剣突坊宛

六月末日〆切

## みどりのかけ

今日歸る故郷に足袋の穿き心地

泣いて來た子へ叱れない母でゐる

新道へそれていきなり雨に逢ひ

長男に父の故郷は淋しすぎ

旅世帯散步の唄に寝るときめ

迷柳

竹丸

唐人

柳葉女

小竹

なぐさめへ白いうなじの未亡人

金策にゆく父親の夏羽織

紫陽花の化け切つてゐる梅雨の霽れ

物一つ思へば梅雨の顔になり

湯のはてり我家を狭く寝轉がり

姿見へ瘦せる苦勞をして疲れ

夏瘦へ水白粉の瓶がすみ

子を抱いて出れば番地を又きかれ

言傳てをたしかめて出る羽織紐

珍竹林

曉天

痴佛

潮路

久春

晴朗

本調子

面白子

夢一佛

## 川柳家閱歷

【三十一】

大阪市港區市岡元町二丁目貳六

住 所 奈良市肘塚町一七

氏 名 小林芳雄

雅 號 義矢滿

年 齡 四十三才

職 業 王冠製造商事株式會社社員

閱 歷 大正九年大毎柳壇へ恐るゝ投句し、始め

て川柳の味を知り、重病の父を國許へ見舞

つてその手文庫から世に川柳専門誌あるを

知り、爾來主として番傘の人達に育てられ

て今でも勵まされ叱られながら傘の内に雨

やどりをしてゐる

### 自信句

一、思ひ出の通りに汽車は曲るなり

二、隣の子あやまりに來てまた貰ひ

三、雷は河内へ落ちた冷やつこ

四、親戚で妻を叱るに言葉あり

五、花の留守いま居た猫も出てしまひ

【三十二】

本 籍 岐阜縣吉城郡國府村八日町

住 所 全 上

氏 名 牛丸淺吉

雅 號 芽柳坊

年 齡 四十八才

職 業 商業動八等功七級廢兵、國府村商工會副會

長、全吉城郡南部煙草小賣人組合評議員兼

幹事

閱 歷 無學去る日露廢兵にて負傷の爲め出血目下

病弱にして昭和三年夏頃よりあけほの會へ

出句習作中

趣味

なし

### 自信句

一、獨身者寝るだけと云ふ家を借り

二、コップ酒日暮の道に元氣付け

三、ノートに勅題を書く一年生

四、保険屋の名刺繼子の様にみる

五、屋上に盆栽造る二階がり

## 【三十三】

本籍 島根縣那賀郡濱田村  
住所 函館市東川町一九八  
氏名 森信  
雅號 里魚  
年 三十六  
職業 藥劑師  
閱歴 函館川柳社事務所(昭和三年マデ)  
自信句 ひぐま川柳事務所(昭和四年度カラ)  
一、行例を抜けて提灯火を貰ひ  
二、何事も言つて呉れない石の塔  
三、男親面白想で子をあやし  
四、年禮に來て女教師琴を弾き  
五、荒はくあける箆筒のいゝかほり  
【三十四】  
本籍 大阪市北區小松原町五二  
住所 大阪市東區北久寶寺町四ノ七野口方  
氏名 石島正  
雅號 元(正吉)現在(悟空)  
年 乙種合格どこです  
職業 丁稚であり中番頭

閱歴 番傘川柳社同人  
趣味 映畫、スケッチ、漫畫、映畫物語、(活辯)  
登山、漫談、赤い灯青い灯、まだく有り  
ます

其 骨のある魚は嫌ひで鰯だけを好む、大相場  
師たらんと夢見る氣になるのは悪筆です  
自信句 せうかと思ひます五句多い様です  
一、銀行の窓口通帳の幅  
二、十二月三十一日少し寝る  
三、集金人募集百圓保證金  
四、東山遠く舞妓の畫が描かき  
五、日本刀明治は長くさげてゐる  
【三十五】

生地 東京神田山本二  
住所 東京神田區松富町八  
氏名 城所鶴男  
雅號 最初は本名を使用す次にすゞめ、となり如  
江と變りて現在の夢男となる  
年 満貳拾三才  
職業 料理用ストウブ製作

## 閱歴

大正十三年師走、都新聞の投吟が病つき昭和三年二月すゞめ吟社神田支部へ入社同年九月よりすゞめ吟社同人となる。  
昭和四年二月意ありて同社同人を辞して今日となる

## 趣味

芝居。落語。雜俳  
己惚を持してゐる作品

- 一、伯山が又次郎長で餅をつき(處女作品)
- 二、物思ひ隣の笑い聲に立ち
- 三、派手の浴衣が似合う瘦せぎす
- 四、木枯は女世帯へ夜もすがら
- 五、炭の香りに盡さる雪の夜

## 句會報

五月八日午後より平瀧町住吉屋樓上にて東都佐瀬劍珍坊先生御來泊を機とし小集を催す

## 宿題 舟

佐瀬劍珍坊先生選

## 前 拔

渡し舟今年の作の出來を聞く

有頂天

## 趣味

映畫、スケッチ、漫畫、映畫物語、(活辯)  
登山、漫談、赤い灯青い灯、まだく有り  
ます

其 骨のある魚は嫌ひで鰯だけを好む、大相場  
師たらんと夢見る氣になるのは悪筆です  
自信句 せうかと思ひます五句多い様です  
一、銀行の窓口通帳の幅  
二、十二月三十一日少し寝る  
三、集金人募集百圓保證金  
四、東山遠く舞妓の畫が描かき  
五、日本刀明治は長くさげてゐる  
【三十五】

生地 東京神田山本二  
住所 東京神田區松富町八  
氏名 城所鶴男  
雅號 最初は本名を使用す次にすゞめ、となり如  
江と變りて現在の夢男となる  
年 満貳拾三才  
職業 料理用ストウブ製作

藤の花舟届きさう通り抜け  
釣舟へ閣下新聞記者を避け  
舟酔の妻へ遊覧氣づかはれ  
手で歩く様にボートをにらせる

夕刊の寫真に小舟浮いて居る  
一服を吸いつけて舟流させる  
舟遊び藝者を乗せる手間がこれ  
母親ヘンツコをさせる潮干船

神苑の鳩へ坊やの手が延びる  
うらゝかさ鳩の羽風に塵が舞ひ  
放たれた鳩葬儀社へ舞ひ戻り  
傳書鳩後詰の隊の氣が焦る  
うらゝかさ坊やと遊ぶハートのむれ

## 宿題 ハト

## 前 拔

渡し舟今年の作の出來を聞く



お幾つと問はれて坊や指を見せ  
指角力座り崩れて負かされる  
酒が好きだった佛へ酒もそへ

席題 くし

串の芋あふなさに子は嚼ちり

地

酔った眼へ串が落ちて土間の色

人

田樂の串が散らばる花の下

.....

中串をお二人前と澄んだ聲

傘の骨を削つて串が出来

膳のくし敷へて錢をのせて去り

一つくし 抜き上げてやるくし 團子

(六月七日着便)

柳界消息

川柳久良岐社

客月高島式部乃自五十年祭ヲ營マル、青葉のかけ

一部贈ラ

西原柳雨氏

客月御逝去古句研究者トシテ有名、享年ハ五十三  
六十五、六十六ト活字ノ入レ違ヒカ記者ノ覺エ違  
ヒカ各誌同シデナイ。

(之ヲ見テモ本誌ノ川柳家閱歴ハ、意義アルコトヲ  
信ズ)

葵

今回番傘川柳社へ合併

野菊

之モ今回紙魚へ併合

濤創刊

富山縣氷見町中町「みぞれ吟社」

久良岐翁の川柳雅號については大によい参考にな  
る事と信じます。茲に感謝の意を表します

×

×

×

風川柳會ビタ

六月一日 風石 一鳳 風水 風人 蘆笑 七笑  
秀聲 千鳳としを

編輯後記

◆今年も本月中で半歳です忽ち六冊が出た譯です。毎  
月一冊間ぬるい様ですが、中々忙はしく過ぎます

◆何も蚊も只一人でやると結構暇が取られます、然  
し同人が一人二人殖えたことで喜び或は三人四人が

退けたことで悲觀する心配もなく、其所へゆくと個  
人誌は吞氣です。

◆近來投句がメツキリ減りました。ドン／＼御送り  
下さい、中にはカナリ倦怠期に入つたではないか

と思はれる方もあります、大抵誰かが逢着する行  
き詰りの苦悶時代です。之を突破しなくては一人  
前にならないと思ひます。

誌代領收

金貳圓 市原陸郎氏 金一圓六十錢 田中笑月氏

金壹圓 長谷川阿北齋氏 金一圓三十錢 井尻千畝氏

金三十錢 中村山門氏 金廿錢 小野民之助氏

外誌代切れの方が大分あります。御拂込下さい。

◆本誌は擴張誌として諸方面へ贈呈した分が數十部  
あります、是非御後援御購讀の上眞の川柳の甘美

さを味つて頂きたい。

◆飛騨支部大池華山氏

支部員皆健在、但シ農繁期ニテ多忙句會開催モ出  
來ストノ事

寄贈誌御禮

(東京) きやり すゞめ むさしの 草詩 行詩

五色墨

(大阪) 番傘 川柳雜誌 玉むし 鬼灯 三味線草

立春 南海新聞

(京都) 葵 紙魚 京 紅椿 野菊

(横濱) うしほ (甲府) さんにち (石川) 猫柳

(静岡) 大豊橋 静岡川柳 (埼玉) 新興の青年

(愛知) 紫 愛知

(長野) 自治新報 (福島) 東北川柳

(神戸) 拍子木 ふあうすと 二挺櫓

(青森) みちのく 花笠

(大連) 白頭家 通 青泥 戎克

(山口) 佐加多利 (天津) 天津

(福岡) くろがね (愛媛) 犬の尾  
(京城) 川柳三昧 (函館) ひぐま (小樽) 氷原  
(廣島) 影像 (富山) 濤

# 募集吟

七月號

至急御送吟ヲ乞フ

手

自轉車

各十句吐

八月號

六月末日〆切

正常

關係

各十句吐

選評 蛭子省二氏

住夢遊氏

九月號

七月末日〆切

氣象

休業

各十句吐

選評 塚崎松郎氏

小田夢路氏

◆柳文雜吟每號募集

川柳あけほの五月號正誤表

26

| 頁  | 段 | 行  | 正       |
|----|---|----|---------|
| 一  | 上 | 七  | 庖丁      |
| 二  | 上 | 一六 | 明日の待たるゝ |
| 三  | 下 | 四  | 餅み      |
| 四  | 上 | 一六 | こさかしく   |
| 九  | 下 | 二〇 | 金魚鉢     |
| 一〇 | 上 | 一九 | 急坂を     |
| 一〇 | 全 | 二  | あるから左に  |
| 一六 | 全 | 六  | 北目觀音堂   |
| 一六 | 全 | 四  | 天下茶屋    |
| 一六 | 全 | 九  | 角筈      |

## 料告廣

表紙金 拾圓  
一頁金 五圓  
半頁金 三圓  
四分頁金 二圓  
一行五號廿五字詰金卅錢

## 刊月

誌代 一年一圓廿錢  
前金ノ事

昭和五年六月七日印刷  
昭和五年六月十日發行

編輯兼發行人 久田克位

同 印刷所

株式會社 甲子堂

發行所 川柳あけほの會

昭和二年九月廿七日第三種郵便物認可  
昭和五年六月十日發行 毎月一回十日

あけほの 第五卷 第六號

金拾錢